

146 日本の陶磁器（2023 年 2 月 2 日）

以前に、1878 年の万博時に、セーブル焼の一对の壺と 69 件の日本の陶磁器との交換が行われたことをご紹介しました（＊１）。セーブル国立陶磁美術館には、その当時に交換された陶磁器を含めて、日本の代表的な陶磁器が展示されています。

日本は、北は北海道から南は沖縄まで全国各地に焼き物の産地があります。経済産業省が認める「伝統的工芸品」に限っても、32 種類の陶磁器が指定されています。伝統的工芸品とは、100 年以上の歴史を有し、今でも伝統的な技術で作られるといった要件を満たす工芸品のことです。

その中でも、日本で最も歴史の長い六つの窯を「日本六古窯（にほんろっこよう）」と呼んでいます。日本六古窯は、2017 年に文化庁によって日本遺産に認定されました。その中で、美術館には、瀬戸焼の茶入れが展示されています（写真右）。瀬戸焼は、愛知県瀬戸市で作られる陶磁器で、千年以上の歴史があるとされています。「せともの」と言えば、陶磁器を指す言葉として使われるくらい瀬戸焼は広く流通しています。



岡山県備前市で作られている備前焼の花瓶も展示されています。備前焼も日本六古窯の一つです。備前焼は炆器で、釉薬を使わず、絵付けを行いません。茶褐色の地肌と焼成したときに地肌に偶然に生まれる模様が特徴です。美術館に展示されている花瓶は、ジャポニスムブームの立役者となった美術商・林忠正（＊２）のコレクションだったものです。



日本の陶磁器の歴史は、茶道の発展なしには語ることができません。16 世紀に千利休によって茶道が大成されたことにより、茶碗、茶入、香合や水指といった様々な茶道具が作られるようになりました。茶碗と言えば、「一楽二萩三唐津」と言われ、茶道の世界では楽焼が一番珍重されてきました。楽焼とは、楽長次郎という陶工が、千利休の指導によって利休の侘茶に合う茶碗を



## パリの日本大使館員がフランスで見つけた日本

作り出したのが始まりと言われています。楽家は脈々と受け継がれ、現在は第十六代が当主になっています。美術館では、赤楽と黒楽を見ることができます（写真右）。楽焼は、ろくろを使わず、手とへらだけで成形します。手で作ることに  
よる僅かなゆがみや厚みがあるのが特徴です。黒楽で抹茶を点てると、真っ黒な茶碗の中に抹茶の緑色が映えます。

次にご紹介するのは、「三唐津」と言われて茶碗で高い評価を得ている唐津焼の茶碗（写真右）です。展示されている茶碗はかなりいびつな形ですが、二つとない味わいがあるものとして、茶人たちは好んで使ったことでしょう。楽焼、萩焼、唐津焼の中では、400年以上の歴史を有する唐津焼が最も長い歴史を持っています。



千利休の弟子であった古田織部が指導して作られた織部焼（写真右）は美濃焼の一種に分類され、織部好みの斬新なデザインが取り入れられました。しばしば緑色が使われるのが特徴です。焼き物の名前は、瀬戸、備前、唐津のように地名であることもあれば、楽や織部というように人名から名付けられているものもあります。



華やかな図柄の作品があまりないので目立ちませんが、セーブル陶磁美術館には、日本を代表する陶磁器が展示されていますので、ぜひご覧になってみてください。

- \* 1 [129 パリ万博と日本（その1）](#)
- \* 2 [77 ジャポニスムと美術商・林忠正](#)  
[78 美術商・林忠正とジャポニザン](#)

※ 美術館の展示は、変更されている可能性があります。